TADOKU JUNIOR　せかいのなぜなに神話　★★★☆☆ ふつう　541語

Why the Parrot repeats the Words of Men

オウムはなぜ人のまねをする

Florence Holbrook（1902年の本）　原文そのまま　朗読：Raybrite

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　いつもほんとうのことを言うオウムは、みんなの人気者。ところが、いっしょにくらすどろぼうの男が、ある夜わるだくみを思いついて……。

In the olden times when the earth was young, all the birds knew the language of men and could talk with them. Everybody liked the parrot, because he always told things as they were, and they called him the bird that tells the truth.

This bird that always told the truth lived with a man who was a thief, and one night the man killed another man's ox and hid its flesh.

When the other man came to look for it in the morning, he asked the thief, "Have you seen my ox?"

"No, I have not seen it," said the man.

"Is that the truth?" the owner asked.

"Yes, it is. I have not seen the ox," repeated the man.

"Ask the parrot," said one of the villagers. "He always tells the truth."

"O bird of truth," said they to the parrot, "did this man kill an ox and hide its flesh?"

"Yes, he did," answered the parrot.

The thief knew well that the villagers would punish him the next day, if he could not make them think that the parrot did not always tell the truth.

"I have it," he said to himself at last. "I know what I can do."

When night came he put a great jar over the parrot. Then he poured water upon the jar and struck it many times with a tough piece of oak. This he did half the night. Then he went to bed and was soon fast asleep.

In the morning the men came to punish him.

"How do you know that I killed the ox?" he asked.

"Because the bird of truth says that you did," they answered.

"The bird of truth!" he cried. "That parrot is no bird of truth. He will not tell the truth even about what happened last night. Ask him if the moon was shining."

"Did the moon shine last night?" the men asked.

"No," answered the parrot. "There was no moon, for the rain fell, and there was a great storm in the heavens. I heard the thunder half the night."

"This bird has always told the truth before," said the villagers, "but there was no storm last night and the moon was bright. What shall we do to punish the parrot?" they asked the thief.

"I think we will no longer let him live in our homes," answered the thief.

"Yes," said the others, "he must fly away to the forest, and even when there is a storm, he can no longer come to our homes, because we know now that he is a bird of a lying tongue."



"THIS BIRD HAS ALWAYS TOLD THE TRUTH"

So the parrot flew away sorrowfully into the lonely forest. He met a mocking-bird and told him what had happened.

"Why did you not repeat men's words as I do?" asked the mocking-bird. "Men always think their own words are good."

"But the man's words were not true," said the parrot.

"That is nothing," replied the mocking-bird, laughing. "Say what they say, and they will think you are a wonderful bird."

"Yes, I see," said the parrot thoughtfully, "and I will never again be punished for telling the truth. I will only repeat the words of others."

地球がまだわかかったむかし、鳥たちはみんな人間の言葉を知っていて、人間と話をすることができました。オウムはいつもありのままを話したので、みんなにすかれていて、「ほんとうのことを言う鳥」とよばれていました。

このいつもほんとうのことを言う鳥は、どろぼうの男といっしょにくらしていました。ある夜、男はよその人のウシをころして、その肉をかくしました。

朝になって、ウシの持ち主がさがしに来て、どろぼうにききました。「わたしのウシを見なかったかい？」

「いいや、見ていないよ」と男は言いました。

「それはほんとうかい？」と持ち主はききました。

「ああ、ほんとうさ。ウシなんか見ていないよ」と男はくり返しました。

「オウムにきいてごらん」と村の人のひとりが言いました。「オウムはいつもほんとうのことを言うから。」

「ほんとうのことを言う鳥よ」と人々はオウムに言いました。「この男はウシをころして、肉をかくしたのかい？」

「はい、そうです」とオウムは答えました。

オウムがいつもほんとうのことを言うわけではないと村の人たちに思わせなければ、あしたばつをうけることになると、どろぼうにはよくわかっていました。

「そうだ」と、とうとう男はひとりごとを言いました。「いい手があるぞ。」

夜になると、男はオウムに大きなつぼをかぶせました。それからつぼの上に水をかけ、かたいカシの木の棒で何度もたたきました。男はこれを夜の半分ほどつづけました。それからねどこに入って、すぐにぐっすりねむってしまいました。

朝になると、男たちがばつをあたえにやってきました。

「わたしがウシをころしたって、どうしてわかるんだい？」と男はききました。

「ほんとうのことを言う鳥が、おまえがやったと言うからさ」と男たちは答えました。

「ほんとうのことを言う鳥だって！」と男はさけびました。「あのオウムはほんとうのことを言う鳥なんかじゃない。ゆうべおこったことさえ、ほんとうのことを言わないよ。月が出ていたかどうか、きいてごらん。」

「ゆうべ、月は出ていたかい？」と男たちはききました。

「いいえ」とオウムは答えました。「月は出ていませんでした。雨がふって、空では大あらしでしたから。夜中まで、かみなりの音が聞こえていました。」

「この鳥は、これまではいつもほんとうのことを言っていた」と村の人たちは言いました。「でも、ゆうべはあらしなんかなかったし、月は明るかった。オウムにどんなばつをあたえようか？」と村の人たちはどろぼうにききました。

「もうわたしたちの家にすまわせないことにしよう」とどろぼうは答えました。

「そうだ」とほかの人たちも言いました。「森へとんでいってもらおう。あらしの日でも、もうわたしたちの家に来てはいけない。うそつきの鳥だとわかったのだから。」

「この鳥は、これまではいつもほんとうのことを言っていた」

こうしてオウムは、かなしい気持ちでさびしい森へとんでいきました。オウムはマネシツグミに会って、何があったかを話しました。

「どうしてわたしみたいに、人間の言葉をまねしなかったんだい？」とマネシツグミはききました。「人間はいつだって、自分の言葉がいちばんだと思っているのさ。」

「でも、あの男の言葉はほんとうじゃなかったんだよ」とオウムは言いました。

「そんなことはどうでもいいのさ」とマネシツグミはわらいながら答えました。「人間が言うとおりに言ってごらん。そうすれば、すばらしい鳥だと思ってもらえるよ。」

「なるほど、わかった」とオウムは考えこみながら言いました。「もう二度と、ほんとうのことを言ってばつをうけたりはしないぞ。これからは、ほかの人の言葉をまねするだけにしよう。」

たんご と クイズ　オウムはなぜ人のまねをする

birds 鳥	**parrot** オウム	**ox** ウシ
jar つぼ	**moon** 月	**rain** 雨
thunder かみなり	**truth** ほんとうのこと	

Q1 **オウムは、みんなに何とよばれていた？**

① ほんとうのことを言う鳥　② 歌のじょうずな鳥　③ いちばん速い鳥

Q2 **男がつぼをたたいた音を、オウムは何の音だと思った？**

① 鳥の鳴き声　② 木がたおれる音　③ かみなりの音

Q3 **森でオウムに「人間の言葉をまねすればいい」と言ったのはだれ？**

① フクロウ　② マネシツグミ　③ どろぼうの男

こたえ

Q1　①　オウムはいつもありのままを話したので、「ほんとうのことを言う鳥」とよばれていました。

Q2　③　オウムは、夜の半分ほどかみなりの音が聞こえたと思っていました。

Q3　②　森で会ったマネシツグミが、人間の言うとおりに言えばすばらしい鳥だと思ってもらえるよ、と教えました。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #22420（Florence Holbrook、1902年）。パブリックドメイン。
挿絵：(1902 edition)（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Raybrite（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。